本紙 12月 11日 11面 1版 モノクロ



公共建築月間　2009年度建築保全センター・記念講演会

# 成熟社会と建築　京都迎賓館をめぐって

## 京都に息づく伝統と建築

日建設計代表取締役会長
**中村 光男氏**

京都工芸繊維大学名誉教授
**中村 昌生氏**

対談

建築保全センターは、2009年度の公共建築月間を記念して11月19日に東京都港区の建築会館ホールで、保全技術研究会・記念講演会を開いた。保全研究会では「新しい視点からの公共建築ストックマネジメント」と題し、公共建築のベンチマーキングと評価・格付けをどのように有効活用して資産改革に生かすか、そして千葉県佐倉市と青森県から先進事例紹介などを受けて、パネルディスカッションを行った。また記念講演会では、「成熟社会と建築－京都迎賓館をめぐって」と題し、中村昌生京都工芸繊維大学名誉教授と中村光男日建設計代表取締役会長との対談を通して、日本の伝統建築の第一人者と設計者との間で京都に息づく伝統と建築について探った。特集では、今回の建築保全センターの催しを通じて、これからの公共建築のあり方を考える。

### 伝統技能で現代和風を実現

国土交通省官庁営繕部
司会 中山 義章

**◇京都迎賓館の意義**

――まず、京都迎賓館の意義についてお伺いします

**中村(昌)** 迎賓館建設の検討委員会では、閣議決定で京都に場所が決まりますと、施設のあり方について種々な討議がなされました。新しい迎賓館は、日本人が日本の建物の中で日本人のもてなし方で、国公賓を接遇する施設であります。

迎賓館として必要な諸施設、和風のもてなしとはどのようなものか、それは現代の日本的もてなしの規範となるものでなければならない、とすれば建物の様式は、今更歴史様式の再現は許されない。討議の結果は「現代和風」の態様を基調とすることに定まりました。

これは長い日本の伝統の粋を現代と融合させることによって創出できる新しい様式です。国公賓がここに宿泊して、本当の日本の空間を体験し、日本の魅力を知ってもらえるような設計、そのための創意工夫が求められた仕事でした。

**中村(光)** 和の空間と一言で言っても、現代の建築では、天井が照明や空調などの設備パネルとなっています。迎賓館でも空調や防災設備などが当然必要です。そこで『日本の空間』との融合を目指して、天井が設備パネルとならないよう、露地に敷いた玉砂利の間から和室への床吹き出し空調を行うなどの工夫を行っています。

また、『庭屋一如』を実現するため、全体が平屋になっています。構造はコンクリートと鉄で堅固にしていますが、その中に「内装」として木を使用するのではなく、木構造を躯体の中に組み込み、安全性を確保しつつ時間とともに美しく変化する『日本の空間』を味わえるようにしています。

**◇技術と技能**

――京都迎賓館ではどのようにして地元の伝統技能が生かされたのでしょうか

**中村(昌)** 「現代和風」の創出のためには、京都に息づく各種の伝統的技能の活用が不可欠でした。

国土交通省は活用検討委員会を設置して、それぞれの分野の最高の技能の保持者に参加してもらうことが可能な道を開かれました。設計者とともに委員会は、設計意図にかなう最高の技能の保持者を探し選んで依頼することができたのです。当局の英断のおかげでした。

**中村(光)** 設計を行う上でも、実施設計や仕上げの段階になると、京都の文化性が問われるようになりました。設計チーム（自身、佐藤義信氏、井上幸江氏）は京都の出身者ではありませんが、仕事を進めるうちに京都の奥の深さが分かってきて、どういう職種や職人がいるのかも分かってきました。

実際に職人さんに会い、職場を見て、自分自身も感銘を受けながら仕事を進めました。木材一つをとっても、実際の木目を見ながら使用する場所を決めていったのです。樹齢七百年の欅は、正面玄関の扉に使いました。自分たちも勉強になりましたし、発注の仕方まで変えていただいたことにより、実現できたことだと思います。

竣工から5年が経ちますが、建具、畳などそれぞれにかかわった多くの人が、今でも自分の仕事に強い関心と誇りを持っています。これだけ多くの人がかかわる和風の新築の建物はおそらく初めてでしょう。また、国がこれほど本格的な日本庭園をつくったことも、おそらく初めてだと思います。

### 現代建築のモニュメントになる

大広間

晩餐室

**◇保全と継承**

――京都迎賓館の保全と伝統技能の継承についてご意見をお願いします

**中村(昌)** 伝統技能に参加された匠たちは、今でも自分たちが京都迎賓館で成し遂げた仕事に誇りと関心を持っています。庭園に至っては毎日のように見回らねばなりません。世間では伝統に向き合う仕事は創作でないように見られがちですが、決してそうではない、伝統を掘り下げればそこには豊かな創作の泉が湧きでています。京都には底深い伝統が活動しており、迎賓館の仕事がそれを知っている人たちを集めてくれました。

明治以降、日本の建築界は洋風建築の導入、発展を主流としてきました。主流の陰になりながらも、それ以前の伝統を継承しながら近代化を推進してきた建築が、明治、大正、昭和戦前の「近代和風」の世界です。新時代の実業家たちが、富と文化的教養を傾け、名工と力を合わせて造りあげた庭屋一如の邸宅や山荘などには、今や再現できない名作が少なくありません。迎賓館の設計には、こうした近代和風の名作を通じて建都千二百年の日本の伝統の粋が汲み上げられ、それと現代技術との融合が試みられたと思います。

**中村(光)** わたしも8年間設計者として京都迎賓館にかかわり、本当の伝統建築を勉強させてもらいました。改めて日本の職人の心意気や生きざまに歴史を感じました。また、現在は地球環境が懸念されていますが、京都迎賓館はとても環境に適した形をしています。省エネも設計に反映されていますが、日本建築が元々持っている力を改めて感じています。

京都迎賓館にはこれまでに47組の外国からの来賓をお迎えしたと聞いておりますが、その方々が一様に日本を尊敬するのはハイテクノロジーへの信頼感だけでなく、京都が千年、千五百年という文化や歴史を維持していることだとおっしゃると、聞いています。京都迎賓館は、日本が現在でも新築でこうしたものを創り出すことができると言うことで感銘を受けておられます。

**◇現代建築と伝統建築**

――伝統建築と現代建築の関係は今後どのようになると期待しますか

**中村(昌)** 明治以降建築の近代化の主流を発展させてきた現代建築は、構造と素材の違いによって、日本の長い伝統とは断絶し、一世紀余りの歴史しかありません。建築家は往々ソフトよりハードを重んじがちです。京都迎賓館の設計者が、近世以前からの長い伝統を継承してきた近代和風に肉薄して、現代和風のソフトをつくることに努力を惜しまなかったところをたたえたいのです。この迎賓館こそ、日本の建築の長い伝統につながる現代建築のモニュメントになるかも知れません。

**中村(光)** 京都迎賓館はハード面も驚くべきものですが、発注者、設計者、委員会メンバー、職人さんなどつくる人たちにも大いに恵まれました。竣工間際には、職人さんたちと「あと半年、あと3カ月しか一緒にいられない」と、別れを惜しみながら仕事をしました。思いまで共有したことが建物に宿っており、それを海外からの来賓の方々に感じていただけるのでしょう。このプロジェクトを通して、日本の文化のアイデンティティーを自分たちの設計する建物に生かすよう努力していきたいと感じています。

## 公共建築のあり方を考える

### 庭と建物が一体となる『庭屋一如』

財団法人建築保全センター
理事長　**尾島 俊雄**

昨今、公共建築の新築激減と同時に、約7億平方㍍ある公共建築ストックの保全が重要な課題になっています。厳しい財政状況、少子高齢化、大規模修繕時期を迎えた大量の公共建築等が背景にあり、この課題への取り組みの重要性、期待は、昨年度から実施している853地方自治体への調査結果でも示されております。

保全技術研究会では、「新しい視点からの公共建築ストックマネジメント―施設有効活用と資産改革を探る―」をテーマに、保全の視点からの安全性の格付け（RANKING）と環境・経済性の評価（RATING）、BIMMSによる光熱水費等の比較、FM先進自治体の千葉県佐倉市と青森県の報告等がされ、特に市民の声に敏感な首長にとって、施設の有効活用等を図る上でBIMMSが有効だと報告があり、光熱水費等のベンチマーキングが合意されたことは意義あることです。

また記念講演会では、「成熟社会と建築―京都迎賓館をめぐって―」をテーマに、伝統建築の第一人者である中村昌生先生と設計者中村光男日建設計会長の対談をお行っていただきました。

1909年に文明開化の象徴として西洋式建築の赤坂離宮（現赤坂迎賓館）が建設されましたが、100年を経て建設された京都迎賓館は、中村先生の「庭屋一如」の思想と指導を得た現代和風の建築であり、また先生の「日本の文明開化は終焉」を迎えた」と言う感想に共感する次第です。

### BIMMSで施設有効活用

1200余年の都・京都を舞台に、成熟社会と建築のあり方について、世界に誇れる日本の伝統建築について、お二人からお話を伺うことができたことに感謝申し上げる次第です。

### 庭と建物が一体となる『庭屋一如』

**◇職人の仕事**

――職人の技を感じたのはどのような点でしたか

**中村(光)** 着工前に文化財調査が行われていますが、建設地から出てきたのは、今では入手困難な「聚楽土」でした。国土交通省がその土を保管していたおかげで、壁の上塗りに使うことができました。最近は左官が土から作ることはないのですが、このときは床をつくってから藁を混ぜ、月に一度こねて、藁がなくなってから再び藁を入れることを約1年間繰り返して作りました。

**中村(昌)** 職人衆にはこれまで経験したことのない技能が求められました。なにぶんスケールが大きいのと、躯体の中での大工仕事です。角物だけでなく、面皮丸太や丸太も使います。丸太普請は京大工の特技です。長い部材の取り付けや、12㍍にも及ぶ天井の一枚板を鉋で削り上げねばなりません。

また、聚楽土は水でこねます。水ごねの土で、長い壁面を鏝の跡の残らないよう、息をつめて鏡のように塗り上げることは、容易な技ではありません。

建具でも、2㍍以上の内法高に建てる繊細な明障子、材のとり方はむつかしく、障子を両側に引きあけた時、竪框の見込が並んだ時の木目が一つの木から取ったような表情に整えたり、下から吹き上げる空調への対処も必要でした。畳には、畳表の中央で藺草を継ぐ中継ぎ表を採用、これも今ではやらない手法です。

**中村(光)** 京都迎賓館では、庭も重要な役割を持っています。庭と建物が一体となる『庭屋一如』です。造園は十六代目佐野藤右衛門さんを棟梁として、建物とのかかわりや景色とのバランスをとり、全体を一つのものとしてつくりあげています。使われている石も、江戸時代に瀬戸内海の塩田で使われていたものや、鴨川の古い橋の橋脚などで石組みを構成しています。

### ■京都迎賓館について

施設概要

▷施設名称＝京都迎賓館
▷所在地＝京都市上京区京都御苑23
▷地域、地区＝第二種中高層住居専用地域／建ぺい率40.1％（許容60％）／容積率77.6％（許容200％）
▷敷地面積＝２万0,140平方㍍
▷建築面積＝8,074平方㍍
▷構造階数＝鉄筋コンクリート造（一部鉄骨鉄筋コンクリートおよび鉄骨造）、地下１階地上１階一部２階建て
▷延床面積＝１万5,623平方㍍
▷各階面積＝地下１階―8,444平方㍍、地上１階―6,999平方㍍、地上２階―179平方㍍
▷杭、基礎＝直接基礎、一部地盤改良
▷屋根形状＝入母屋屋根（一部切妻屋根）緩勾配、金属板葺き
▷最高高さ＝10.85㍍
▷最高軒高＝7.60㍍
▷駐車台数＝100台
▷築地塀＝聚楽壁、瓦屋根、高さ約４㍍
▷施設内容＝会議、会談、晩餐、和会食、宿泊および管理部門等
▷設計期間＝1996年（平成８年）10月―2001年（平成13年）３月
▷施工期間＝2001年（平成13年）12月―05年（平成17年）３月
▷総工費＝201億円